

# 共通テスト2年目 平均点大幅ダウン！

難化が予想されていたなか、数学Ⅰ・A、日本史B、化学、生物などが  
センター試験を通して過去最低の平均点を記録！

旺文社 教育情報センター 2022年3月10日

2回目の共通テストの結果が、入試センターより公表された。昨年とは日程等の枠組みを変更して、従来のセンター試験と同じ「本試験」+「追(再)試験」という形で行われた。ただし、新型コロナウイルス感染対策として、その間隔は2週間設けられた。数学Ⅰ・A、日本史B、化学、生物などが、センター試験時代も通じて過去最低の平均点となるなど、多くの科目で平均点がダウン。本稿では結果の概況とともに、過年度実績からの推移データを示す。

※本稿のデータは特記のない場合、大学入試センター公表資料に基づく。

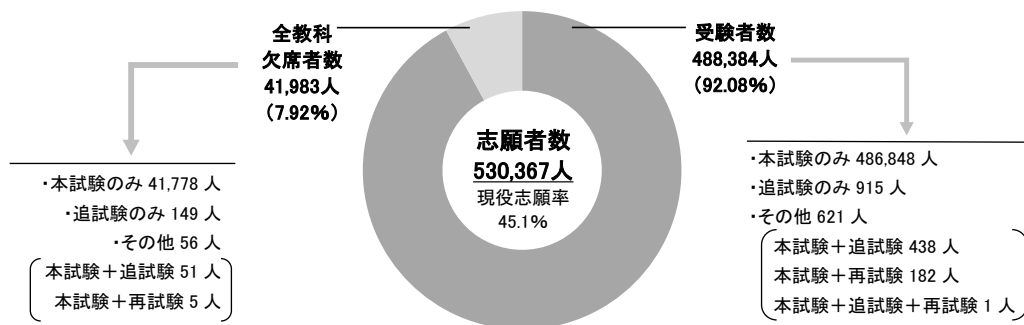
※2021年の結果は“第1日程”のもの、2020年以前はセンター試験本試験のもの。

## ■全体状況(志願、受験、平均点)

2022年共通テストの志願者は530,367人で前年比99.1%。現役生は前年比99.9%で449,369人の一方、既卒生は同94.8%の76,785人。既卒生は一昨年まで10万人を超えていた。既卒生の減少が続き、大学入試がより現役中心になってきている。追試験の受験許可を受けた者は、前年より61人減の1,660人だったが、コロナ禍のもと、コロナを理由(感染、濃厚接触)として追試験の受験が許可された者は465人で前年の224人から倍増した。他の理由も含む実際の追試験受験者は1,354人だった(前年1,429人)。

受験率(受験者数÷志願者数)は92.08%。過去最低だった前年よりは1.63%上昇したが、低い水準だ(p.3図参照)。主に、総合型や学校推薦型の各選抜で既に合格している者が、コロナ感染拡大を受け「無理して受けない」という昨年と同様の動きをしたと考えられる。

■2022年共通テスト 志願・受験状況■



※「現役志願率」は、高校、中等教育学校の卒業見込者における共通テスト志願者の割合。

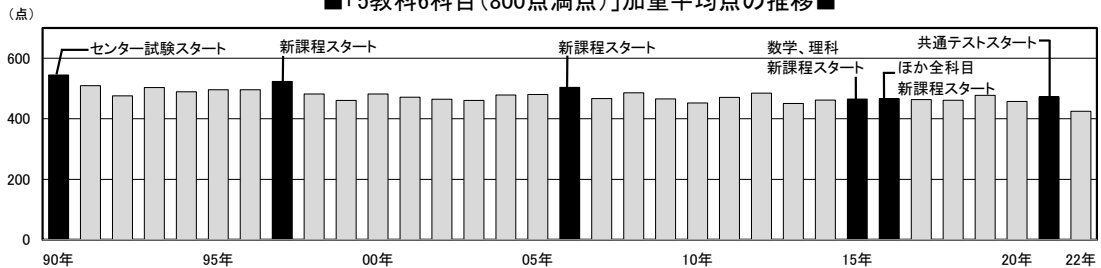
## 2022年度 大学入学共通テスト(本試験) 平均点等一覧[確定]

<2022年2月7日 大学入試センター発表>

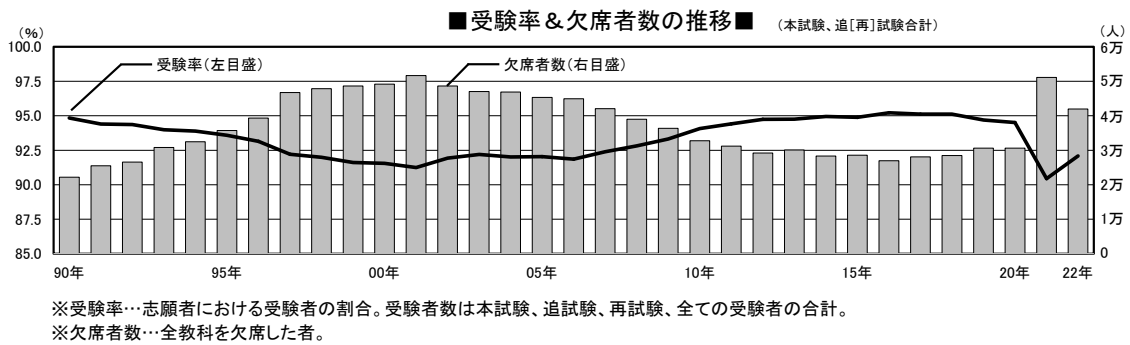
教科	科目	2022年		2021年		前年差		
		受験者数	平均点	受験者数	平均点	受験者数	平均点	
<b>基幹3教科 平均点合計(600点満点)</b> 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語】		— (得点率)	<b>312.53</b> 52.1%	— (得点率)	350.08 58.3%	— (得点率差)	<b>▲ 37.55</b> ▲6.3ポイント	
国語(200点)	国語	460,967	110.26	457,305	117.51	3,662	▲ 7.25	
地理歴史・公民	地理歴史(100点)	世界史A	1,408	48.10	1,544	46.14	▲ 136	1.96
		世界史B	82,986	65.83	85,690	63.49	▲ 2,704	2.34
		日本史A	2,173	40.97	2,363	49.57	▲ 190	▲ 8.60
		日本史B	147,300	52.81	143,363	64.26	3,937	▲ 11.45
		地理A	2,187	51.62	1,952	59.98	235	▲ 8.36
		地理B	141,375	58.99	138,615	60.06	2,760	▲ 1.07
	公民(100点)	現代社会	63,604	60.84	68,983	58.40	▲ 5,379	2.44
		倫理	21,843	63.29	19,955	71.96	1,888	▲ 8.67
		政治・経済	45,722	56.77	45,324	57.03	398	▲ 0.26
		倫理、政治・経済	43,831	69.73	42,948	69.26	883	0.47
数学	数学①(100点)	数学Ⅰ	5,258	21.89	5,750	39.11	▲ 492	▲ 17.22
		数学Ⅰ・数学A	357,357	37.96	356,493	57.68	864	▲ 19.72
	数学②(100点)	数学Ⅱ	4,960	34.41	5,198	39.51	▲ 238	▲ 5.10
		数学Ⅱ・数学B	321,691	43.06	319,697	59.93	1,994	▲ 16.87
		簿記・会計	1,434	51.83	1,298	49.90	136	1.93
	情報関係基礎	362	57.61	344	61.19	18	▲ 3.58	
理科	理科①(50点)	物理基礎	19,395	30.40	19,094	37.55	301	▲ 7.15
		化学基礎	100,461	27.73	103,074	24.65	▲ 2,613	3.08
		生物基礎	125,498	23.90	127,924	29.17	▲ 2,426	▲ 5.27
		地学基礎	43,943	35.47	44,320	33.52	▲ 377	1.95
	理科②(100点)	物理	148,585	60.72	146,041	62.36	2,544	▲ 1.64
		化学	184,028	47.63	182,359	57.59	1,669	▲ 9.96
		生物	58,676	48.81	57,878	72.64	798	▲ 23.83
		地学	1,350	52.72	1,356	46.65	▲ 6	6.07
外国語(200点)	英語	リーディング(100点)	480,763	61.80	476,174	58.80	4,589	3.00
		リスニング(100点)	479,040	59.45	474,484	56.16	4,556	3.29
		合計	—	121.25	—	114.96	—	6.29
		ドイツ語	108	124.26	109	119.25	▲ 1	5.01
		フランス語	102	113.74	88	129.68	14	▲ 15.94
		中国語	599	164.79	625	160.34	▲ 26	4.45
	韓国語	123	144.67	109	144.87	14	▲ 0.20	

- <注> ①2021年の平均点は第1日程のもの(得点調整後のもの)。  
 ②英語の合計平均点はリーディングとリスニングの平均点を足したもの。  
 ③表中の「平均点差」等は、四捨五入の関係で「2022年-2021年」と一致しない場合もある。  
 ▲印は「ダウン」(平均点)、および「減」(受験者数)を示す。  
 ④地歴(各B科目間)、公民(「倫理、政治・経済」除く、各科目間)、理科②(発展科目間)における得点調整は、「物理」-「化学」の13.09点が最大(地学は受験者数が1万人未満のため対象外)で、実施されなかった。

■「5教科6科目(800点満点)加重平均点の推移■



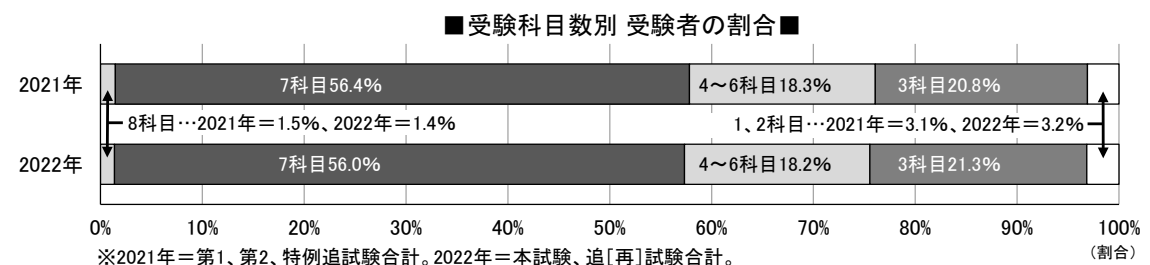
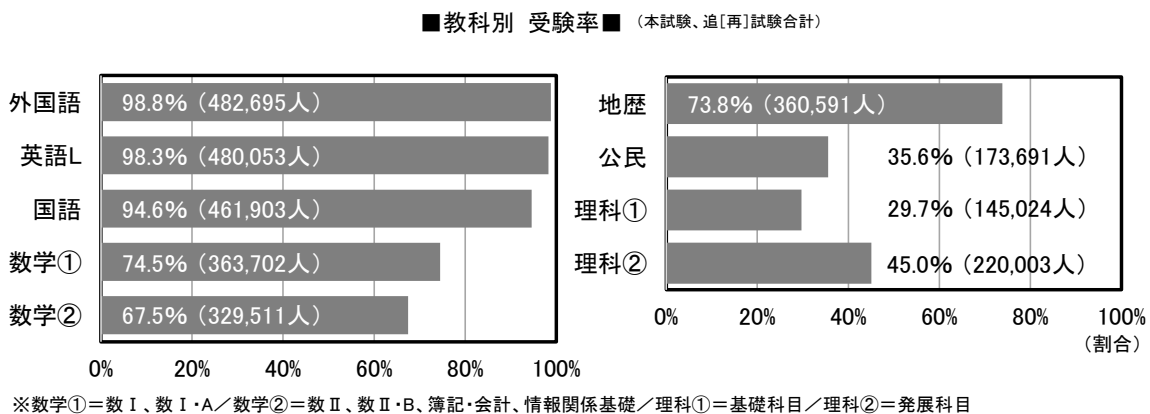
※5教科6科目…国語+数学2科目+外国語+地歴公1科目+理科1科目。  
 ※加重平均点…各教科内で「各科目の平均点×各科目の受験者数」の合計を、各科目の受験者数合計で割ったもの。



前ページに示した科目別平均点の前年差では「▲ (=ダウン)」が目につく。30科目中19科目で平均点ダウン。もっとも平均点が上がった英語 (R+L) のアップ幅が6.29点に対して、下がった科目のダウン幅は総じて大きい。文系型・理系型ともに国公立大志願者が受験する「基幹3教科 (国+数Ⅰ・A+数Ⅱ・B+英語)」の平均点合計 (600点満点) も37.55点ダウンで312.53点、得点率52.1%だ。

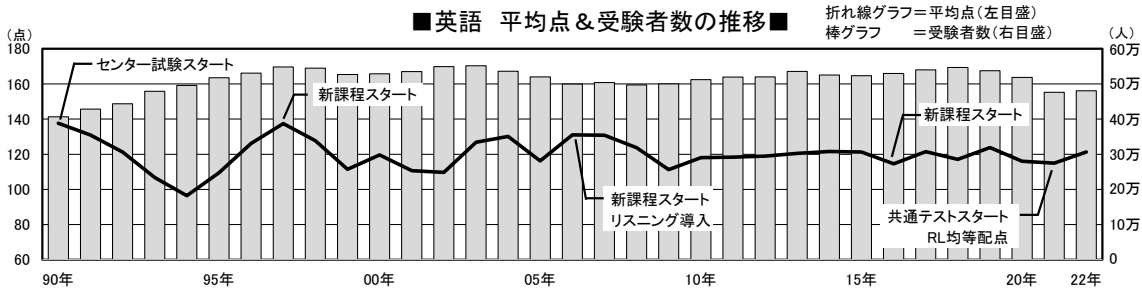
新課程入試など入試の切り替わり時は、初年度は平均点が上がり2年目に下がる傾向が見られる (前ページ「5教科6科目 (800点満点)」加重平均点の推移)。今回の2回目の共テもその傾向通りとなり「5教科6科目」加重平均点は47.36点ダウンし424.91点、得点率53.11%だった。加重平均点47.36点ダウンは過去最大の落ち幅。

教科別の受験率、受験科目数別の受験者の割合 (下図) の傾向は、昨年と目立った変化はない。一方、人数で見ると今年の受験者は昨年より4,270人多い。2科目受験者が369人、3科目受験者が3,207人、4科目受験者が1,089人増加したのが目につく。主に国公立大志願者 (特に国立大) が受験する7科目以上の割合は前年より0.5%減にはなっているが、人数は前年とほぼ同数だった (88人増)。なお、6科目受験者は633人減少した。

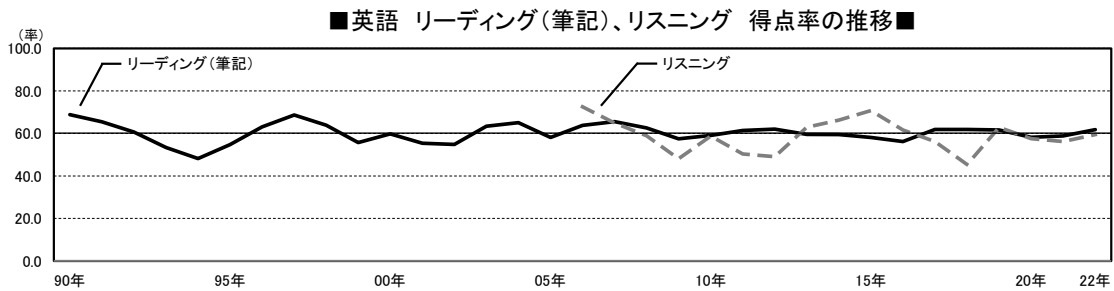


■科目別の平均点(以下、点数のプラス・マイナスは特記がない場合、前年[共テ“第1日程”]との差)

[出題傾向全般]昨年同様に、複数の資料が提示されその情報を整理・統合して解答する問題、必要な情報を抽出して解答する問題、知識だけではなく知識を活用して解く問題、学習の場面(生徒のメモや、生徒同士の会話等)が設定された問題の出題が目につく。思考力だけではなく読解力、情報処理能力も問われ、また、読む分量が増加した科目も少なくなかった。



※「1990年～2005年＝筆記のみ200点」。「2006年～2020年＝筆記200点、リスニング50点の平均点を合計して200点に換算」。  
「2021年・2022年＝リーディング100点、リスニング100点の平均点を合計」。  
※受験者数は、「2006年以降＝筆記(リーディング)」を掲載。



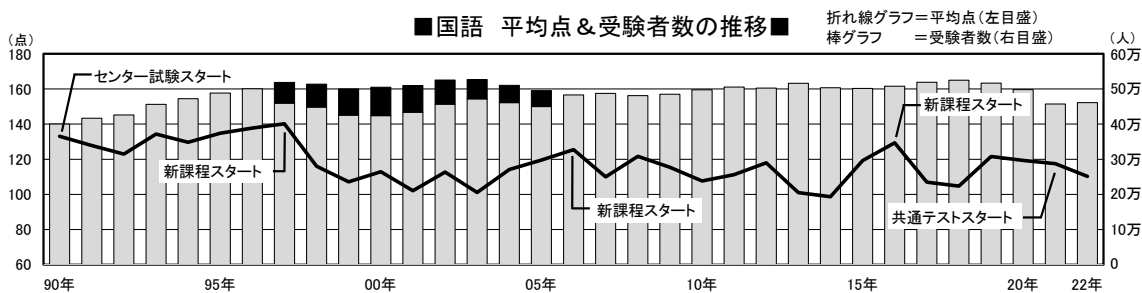
※各年の平均点を100%の得点率に換算したもの。  
※注釈等は前のグラフを参照。

[英語]平均点 リーディング61.80点(+3.00点)／リスニング59.45点(+3.29点)／R+L合計121.25点(+6.29点)

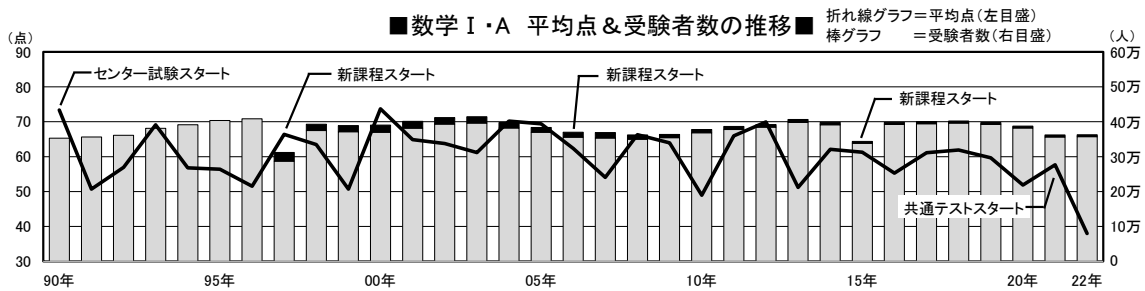
この10年余り、多少のアップダウンはあるものの平均点は安定している。上に示したR(筆記)・Lの得点率の推移を見ても、Rは概ね6割、Lも2019年以降は6割前後になっている。昨年同様に、速読・即解力、情報処理能力、推測力が問われる問題が出された。

[国語]平均点 110.26点(-7.25点)

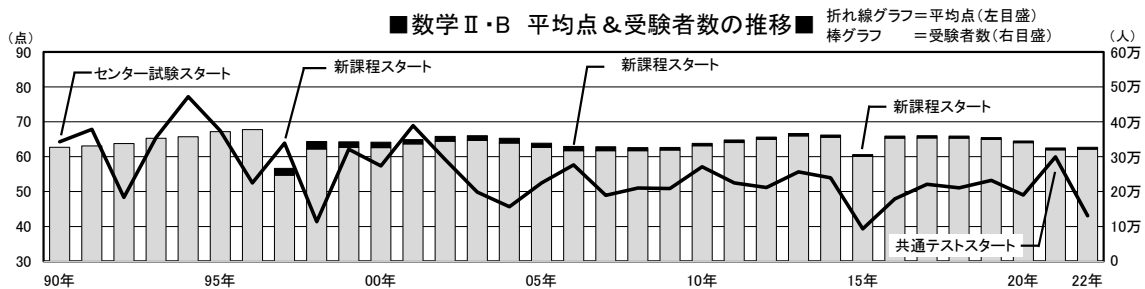
昨年出題されず、今年は可能性が言われていた「実用的な文章」は、出題されなかった。複数素材の関連付けが求められる問題など思考力を重視する傾向でやや難化した。



※「1990年～1996年＝国語」。「1997年～2005年＝平均点は国語Ⅰ・Ⅱ、受験者数は国語ⅠとⅠ・Ⅱの合計」。「2006年～2022年＝国語」。



※「1990年～1996年＝数学Ⅰ」。「1997年～2022年＝平均点は数学Ⅰ・A、受験者数は数学ⅠとⅠ・Aの合計」。  
 ※新課程初年度(1997年は1998年も)の経過措置科目は含まず。受験者数が大きく減っているのはその受験者を含まないため。



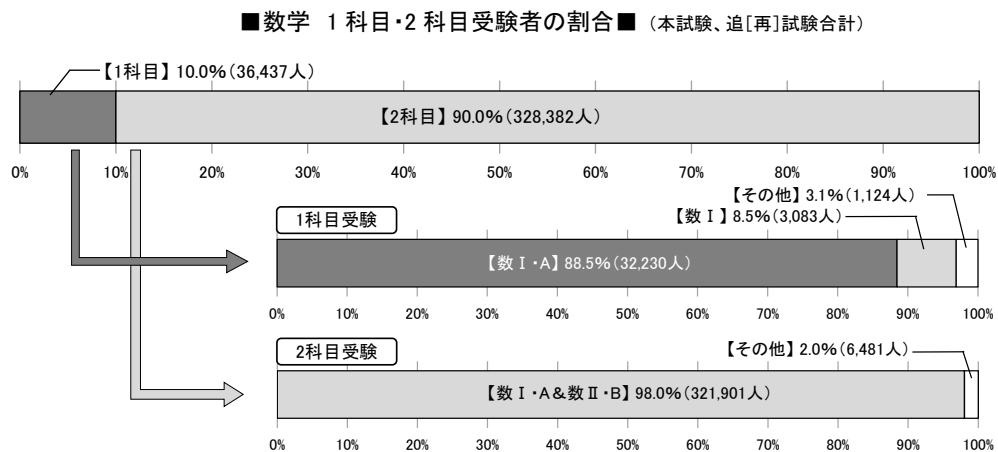
※「1990年～1996年＝数学Ⅱ」。「1997年～2022年＝平均点は数学Ⅱ・B、受験者数は数学ⅡとⅡ・Bの合計」。  
 ※新課程初年度(1997年は1998年も)の経過措置科目は含まず。受験者数が大きく減っているのはその受験者を含まないため。

【数学Ⅰ・A、数学Ⅱ・B】平均点 Ⅰ・A 37.96点(−19.72点)／Ⅱ・B 43.06点(−16.87点)

今年の共テでもっとも耳目を集めたのは数学だろう。平均点大幅ダウンにより、Ⅰ・Aは得点率4割を切り、平均点が過去最低に。Ⅱ・Bは昨年平均点アップで19年ぶりの59点台となった反動もあるだろうが、一転して平均点は過去3番目の低さとなった。

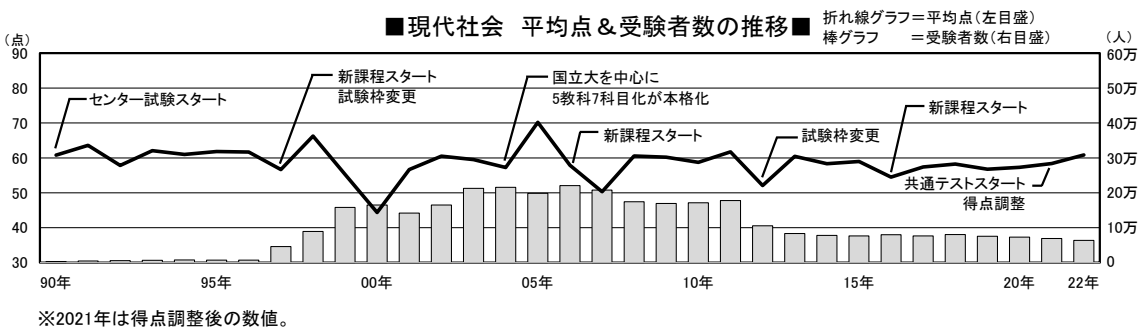
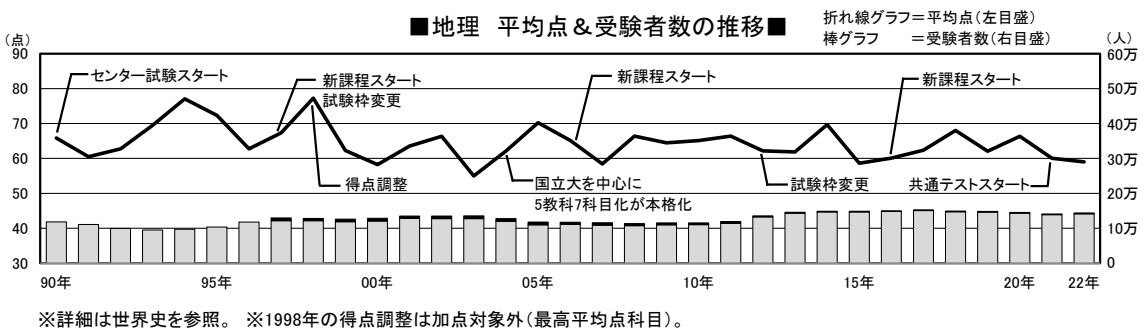
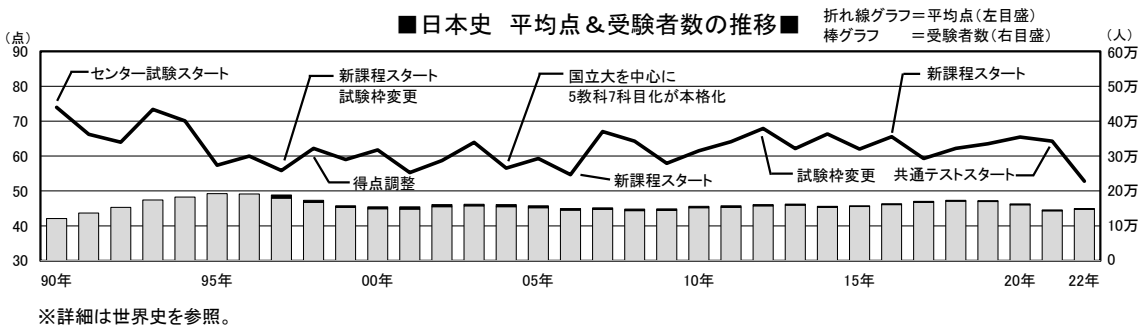
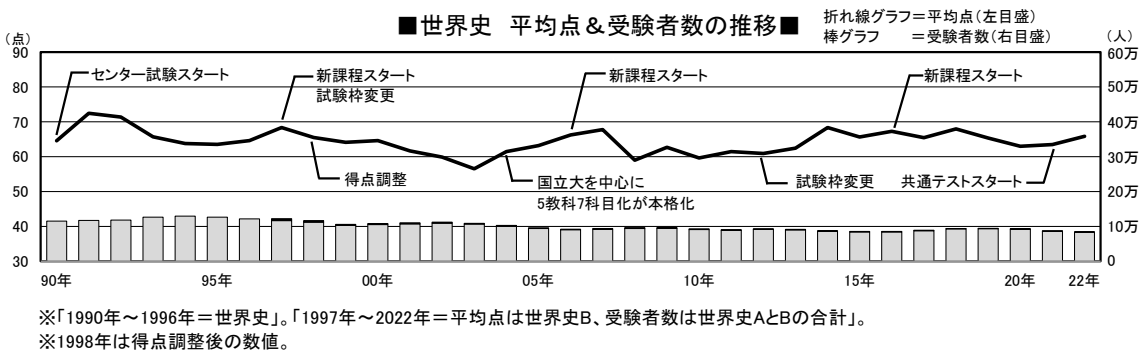
Ⅰ・Aでは、問題文が長く意図を汲み取る力が求められた。また、計算量が多い問題も見られた。さらに、わからない問題があった場合に、いったん別の問題に進んだとしても、ここでもまた長い問題文を読まなくてはならず、時間が取られたと見られる。Ⅱ・Bでも同様に、問題文の長文化が見られた。問題文から必要な情報を読み取って数式化し自分が学習したことに落とし込む作業が求められる問題、本質的な理解を問う問題も多く出題された。

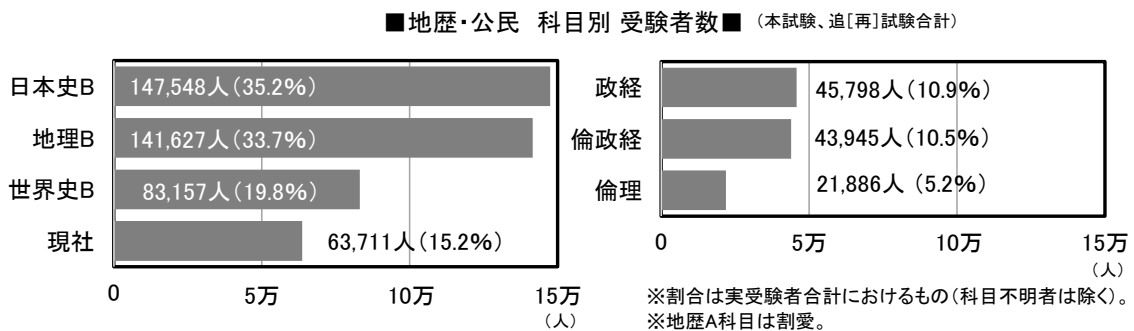
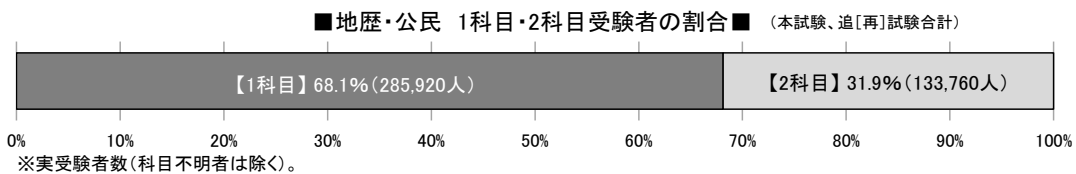
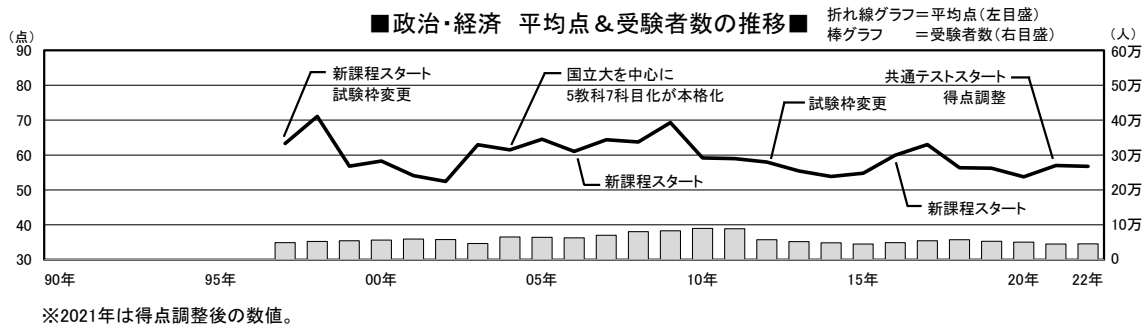
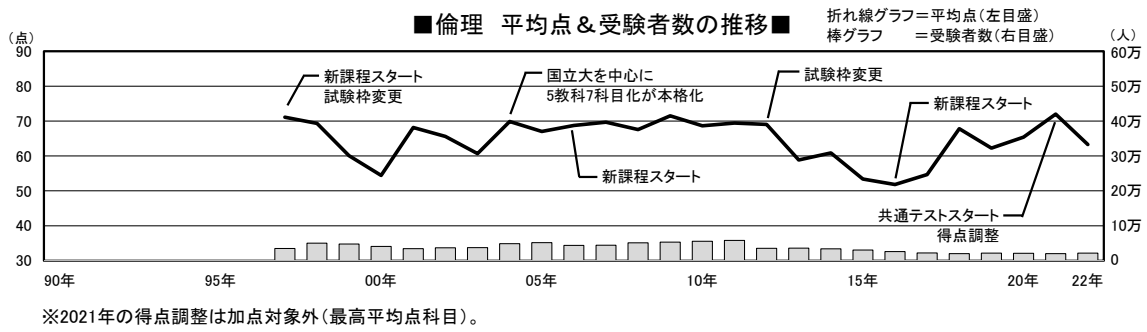
数学受験者の内訳は下図の通り。数学では1科目のみの受験者は全体の1割でそのほとんどがⅠ・Aを受験。9割を占める2科目受験者のほとんどは、Ⅰ・A&Ⅱ・Bの受験者だ。



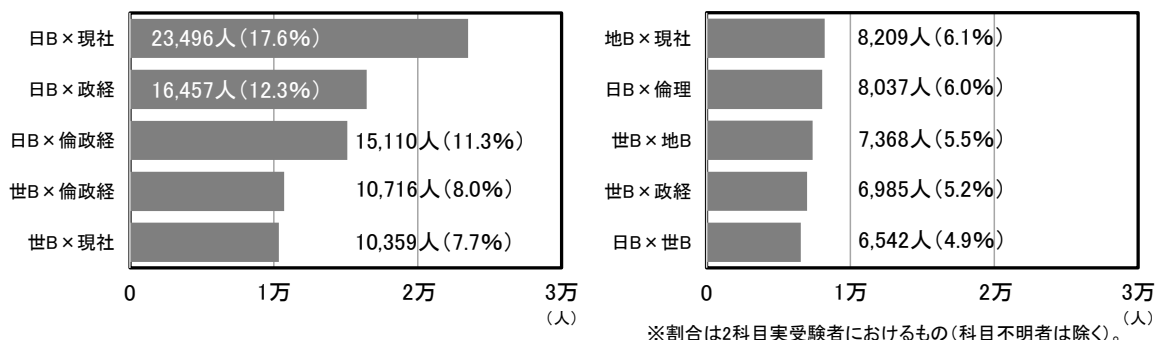
[地歴・公民]平均点 世B 65.83点(+2.34点)／日B 52.81点(-11.45点)／地B 58.99点(-1.07点)／  
 現社60.84点(+2.44点)／倫理63.29点(-8.67点)／政経56.77点(-0.26点)／倫政経69.73点(+0.47点)

実質的な知識問題が見られる一方で、問題にはさまざまな資料が多数あり、読解力も求められた。とりわけ日本史Bでは、多様な資料の読解、多面的な考察、時代の流れの本質的な把握が求められ難化。平均点は前年より11.45点ダウンし、過去最低となった。倫理は平均点が8.67点ダウンしたが、それでも現代社会、倫理、政治・経済の3科目のなかではもっとも高い平均点だ（倫理は昨年、得点率7割を超える高い平均点だった）。





■地歴・公民 2科目受験者 科目組み合わせ■ (本試験、追[再]試験合計/上位10パターン)

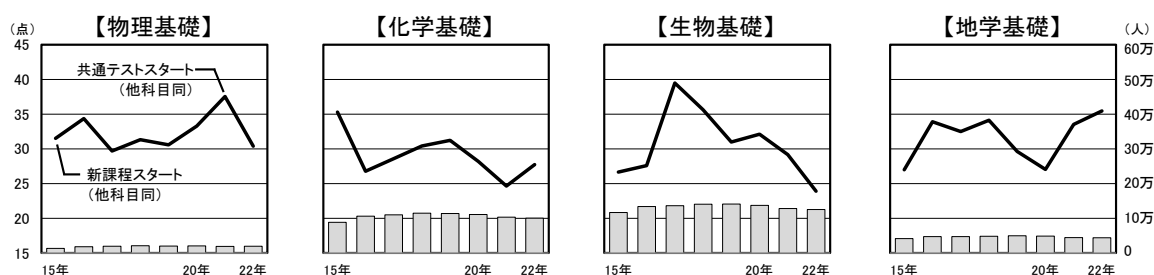


上図は地歴・公民2科目受験者の科目の組み合わせのうち、上位10パターンを示したものだ(この10パターンで、2科目受験者133,760人の84.7%を占める)。主たる組み合わせは、「地歴B科目×公民各科目」で、「地歴B科目から2科目」受験は少数だ。図に出ている「世B×地B」「日B×世B」に、表示されていない「日B×地B」(3,273人/2.4%)を加えると合計17,183人で、2科目受験者133,760人の12.8%に留まる。

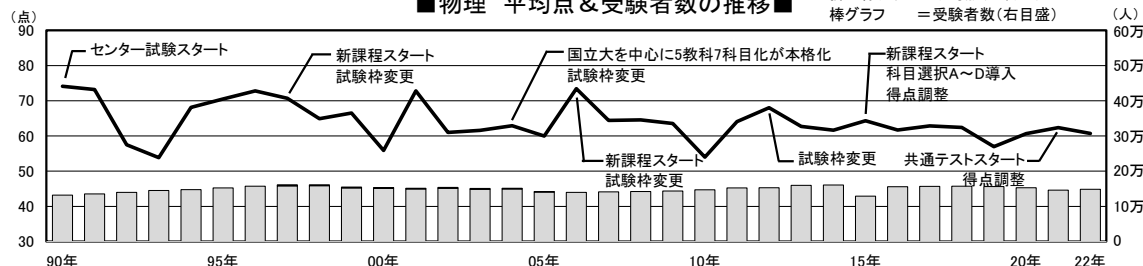
[理科]平均点 物基30.40点(-7.15点)/化基27.73点(+3.08点)/生基23.90点(-5.27点)/地基35.47点(+1.95点)/物60.72点(-1.64点)/化47.63点(-9.96点)/生48.81点(-23.83点)/地52.72点(+6.07点)

基礎科目では生物基礎が目を引く。2年連続の平均点ダウンで得点率5割を切り、過去最低の平均点となった。単純な知識問題ではなく、知識をもとに考察する問題によってやや難化、時間不足も考えられる。

■理科 基礎科目 平均点&受験者数の推移■ 折れ線グラフ=平均点(左目盛) 棒グラフ =受験者数(右目盛)

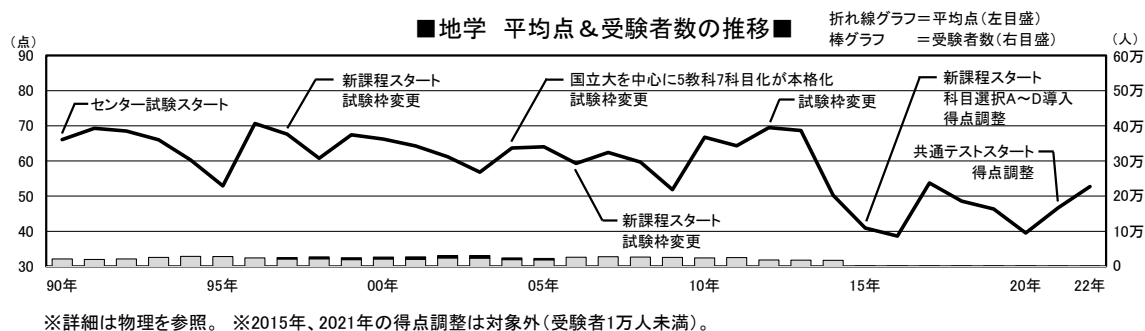
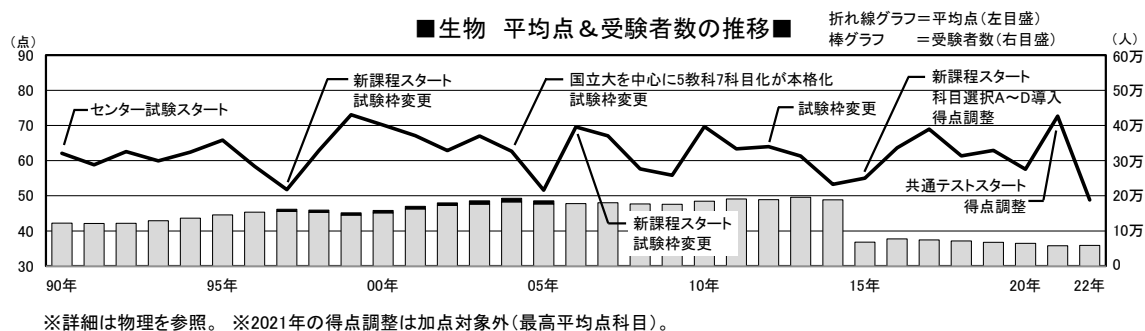
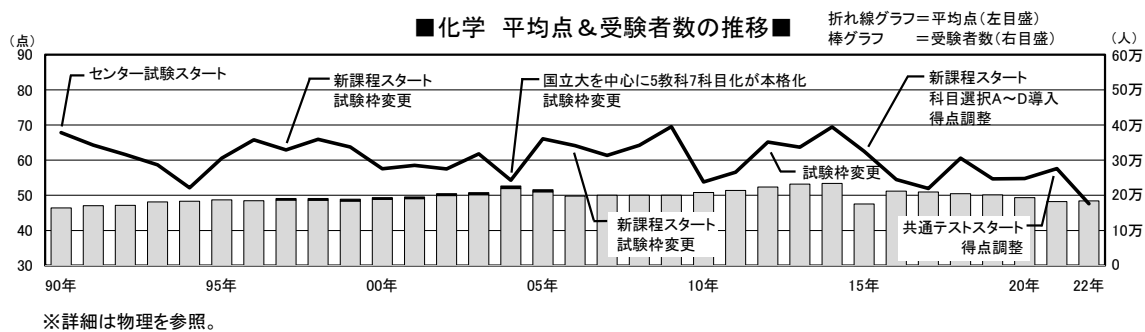


■物理 平均点&受験者数の推移■ 折れ線グラフ=平均点(左目盛) 棒グラフ =受験者数(右目盛)

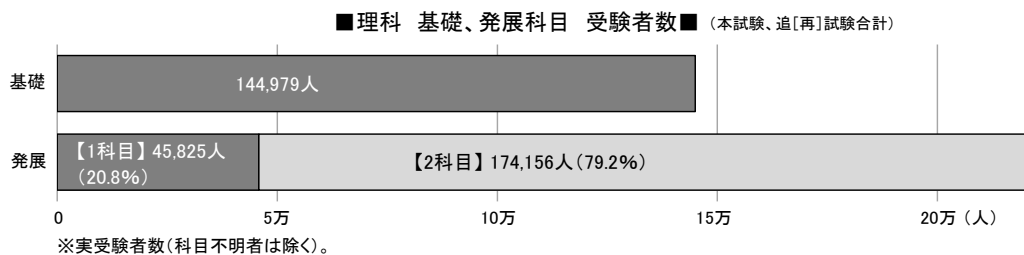


※「1990年～1996年＝物理」。「1997年～2005年＝平均点は物理ⅠB、受験者数は物理ⅠAとⅠBの合計」。「2006年～2014年＝物理Ⅰ」。「2015年～2022年＝物理(物理基礎の受験者数は含まず)」。※2006年、2015年の受験者数には経過措置科目は含まず。 ※2015年と2021年は得点調整後の数値。

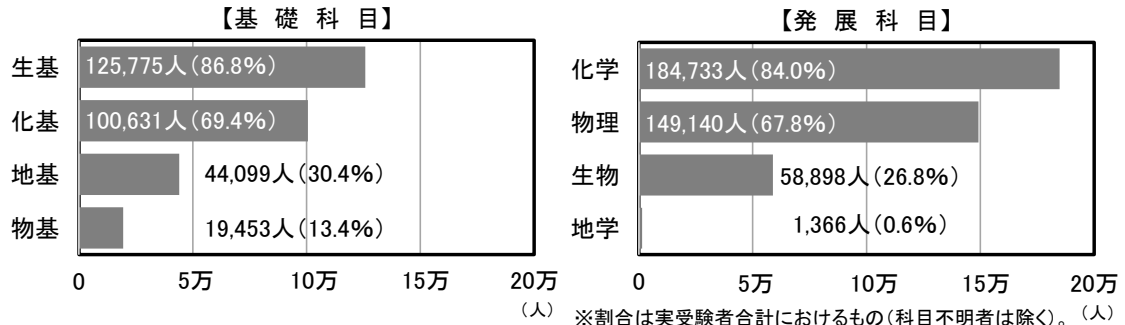




発展科目では、化学と生物のいずれもが得点率5割を切るまで平均点ダウン。過去最低を記録した。化学では、単純な知識問題、リード文から実験設定を理解する問題まで多様な問題が出題された。問題そのものの一部難化に加えて、時間不足も平均点ダウンの要因と考えられる。一方、生物の平均点ダウンの幅は、今年の共テで最大だった。ただし、生物は昨年が一昨年より15.08点も平均点アップして得点率7割を超え、物・化・生・地のなかで最高平均点だった。今年は、知識を活用して考察する問題の増加と、問題文の長文化が見られた。

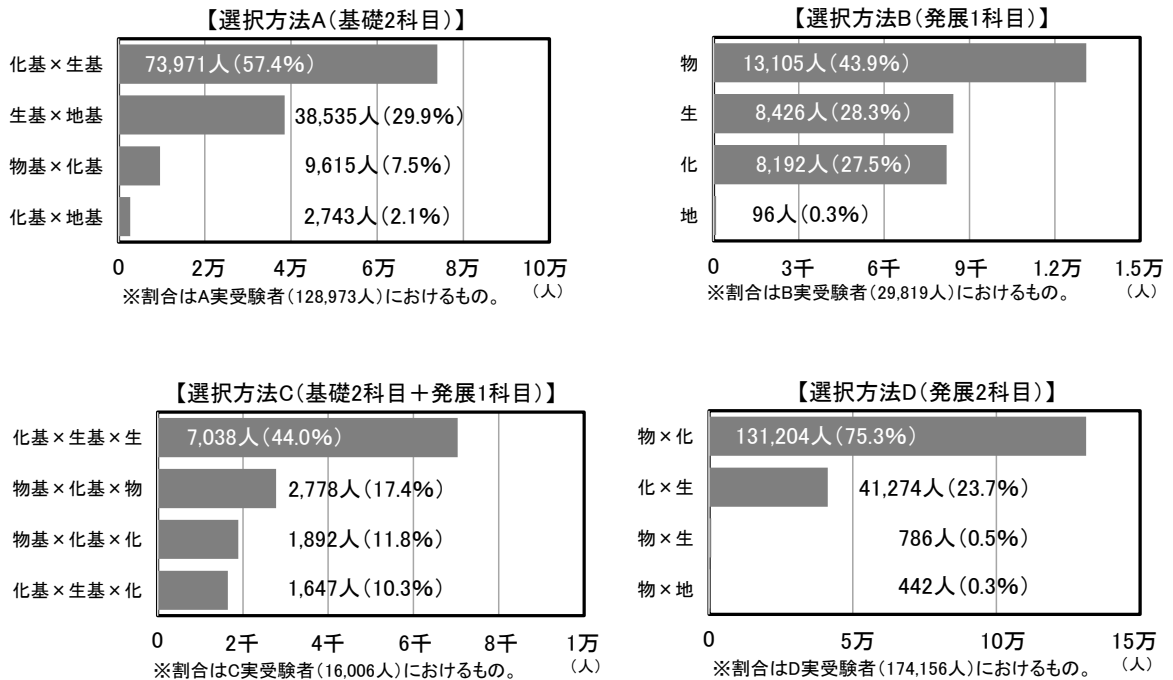


■理科 科目別 受験者数■ (本試験、追[再]試験合計)



※割合は実受験者合計におけるもの(科目不明者は除く)。(人)  
※基礎科目は2科目とも解答科目判明の数値。

■理科 選択方法別 科目受験者数■ (本試験、追[再]試験合計/A・C・Dは上位4パターン)



理科では、共テ出願時に選択方法 A・B・C・D のいずれかを登録する (A=基礎2科目、B=発展1科目、C=基礎2科目+発展1科目、D=発展2科目)。もっとも受験者が多いのは D で 17万人超、次いで A は約13万人。B は約3万人、C は1.6万人に留まる。

選択方法 C では、大学によって、同一名称を含む科目の組み合わせ (たとえば「化基、生基、生」は生物が同一名称として含まれている) が「可」の場合と、「不可」の場合がある。不可の場合は理科3領域を受験することになるが、Cの受験者16,006人のうち92.0%の14,729人が、同一名称を含んで受験している。

## ■主要科目のスタナイン(本試験、追[再]試験共通)

共テから導入された成績表示方法に、段階表示がある。各科目の受験者を得点順におおよそ4%、7%、12%、17%、20%、17%、12%、7%、4%の群に分割。得点の低いほうから順に、1から9の9段階に換算する方式だ(=スタナイン)。

たとえば、今年の共テの理科の発展科目を見てみる。物理90点、化学85点、生物85点の場合、素点では当然物理が高い。一方、スタナインでは物理90点は「8段階」に該当し、化学85点・生物85点はそれぞれ「9段階」となる。受験生の得点分布が異なるためだ。

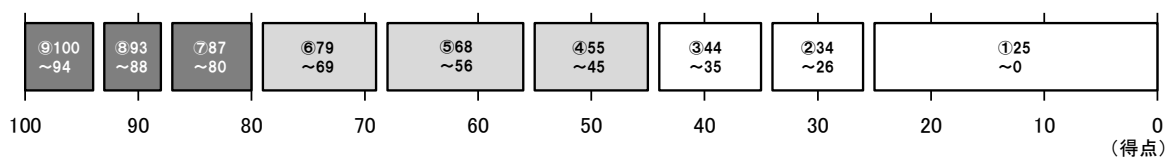
スタナインは、素点では見えない各科目の受験者の位置づけを示す成績表示で、大学は入試で多様な評価方法として利用できる。今後、共テを課す総合型や学校推薦型の各選抜での利用や、一般選抜でも、たとえば募集人員の一部で多様な評価としての利用が、考えられる。このスタナイン、導入初年度の昨年は2月4日の公表だったが、今年は国公立大一般選抜の出願前、1月21日に公表された。

※グラフ横軸は得点、マル数字はスタナインの成績、数字の範囲は得点を表す。

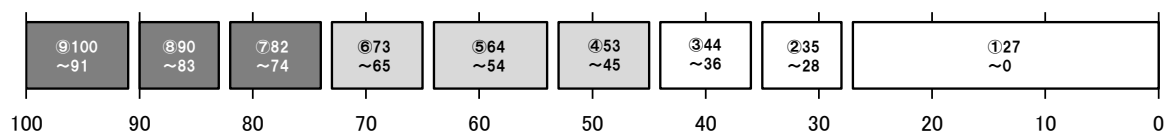
※各段階は受験者の集団を得点順におおよそ以下の割合で分割。

「①=4%」「②=7%」「③=12%」「④=17%」「⑤=20%」「⑥=17%」「⑦=12%」「⑧=7%」「⑨=4%」。

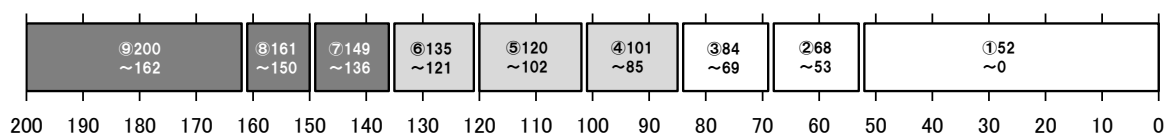
### 【英語R】



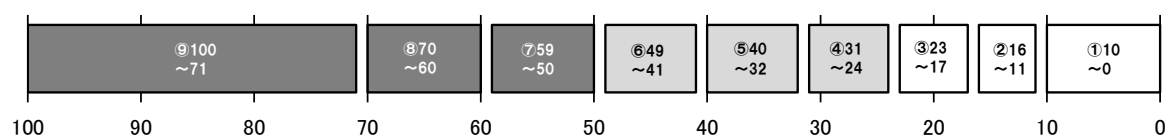
### 【英語L】



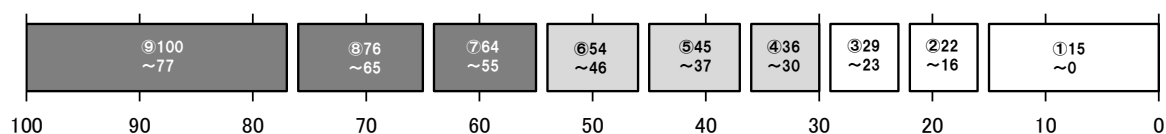
### 【国語】



### 【数学Ⅰ・A】

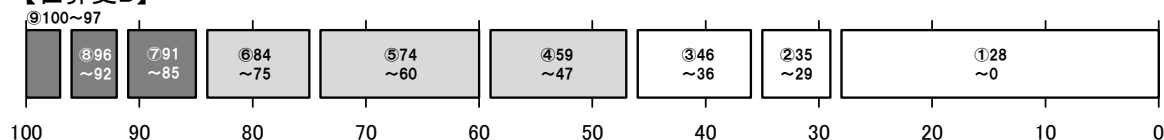


### 【数学Ⅱ・B】

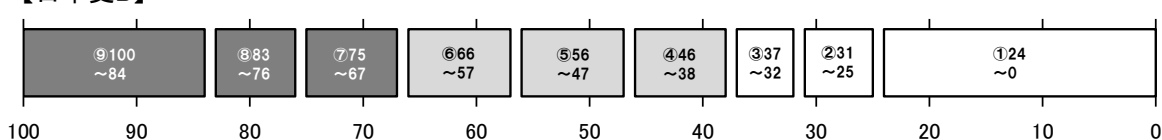


たとえば、平均点大幅ダウンで話題になった数Ⅰ・Aのスタナインを見ると、得点上位4%であるスタナイン⑨の幅が71点～100点と広い。白抜き文字で示したスタナイン⑦以上の高得点者層（上位23%）が得点50点まで分布しており、残りの77%の受験生が49点以下にひしめき合っているとわかる。スタナイン①～⑤、つまり受験者の60%は40点以下に分布していることも読み取れる。

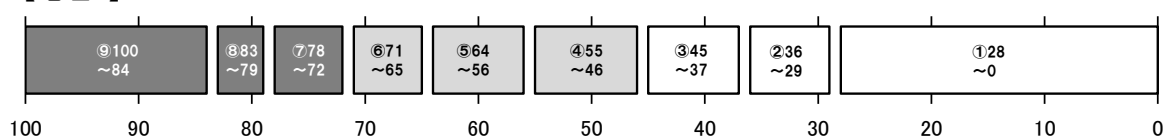
### 【世界史B】



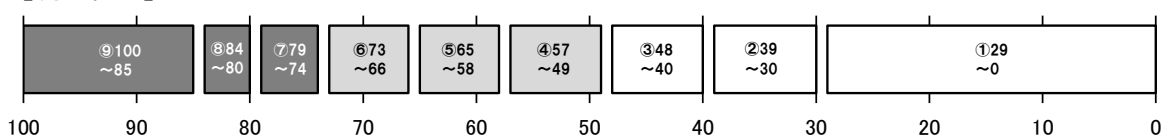
### 【日本史B】



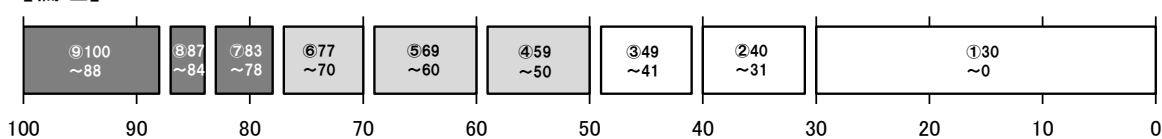
### 【地理B】



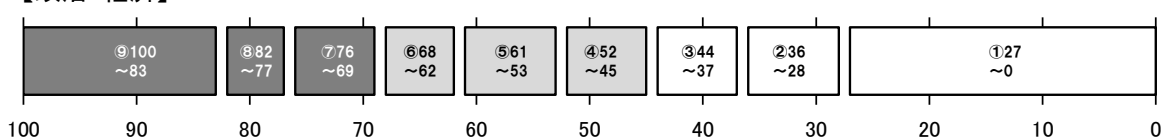
### 【現代社会】



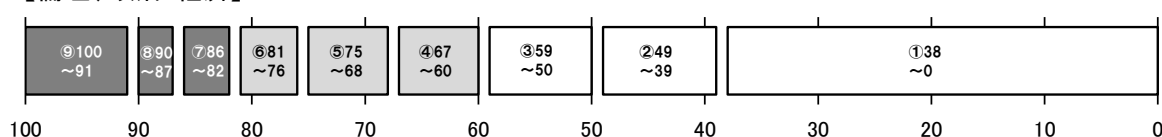
### 【倫理】



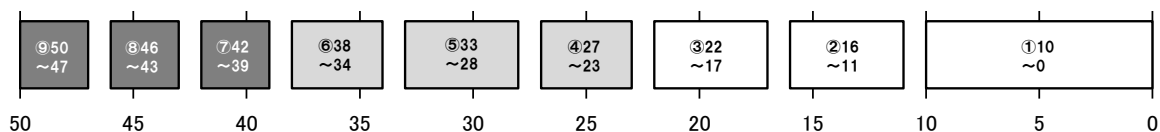
### 【政治・経済】



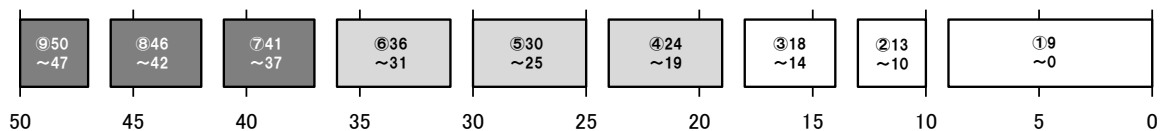
### 【倫理、政治・経済】



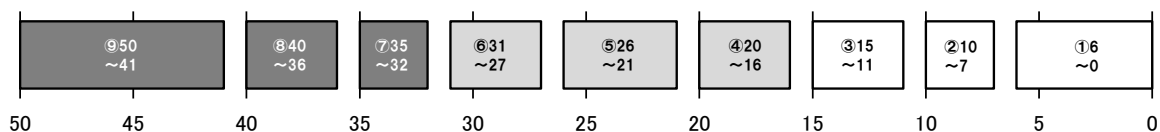
【物理基礎】



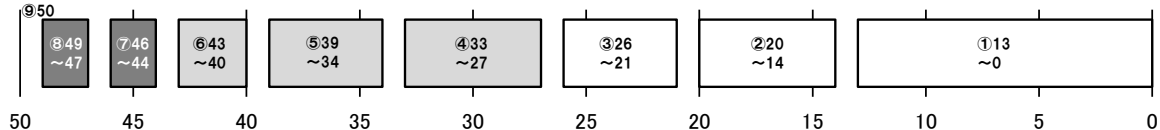
【化学基礎】



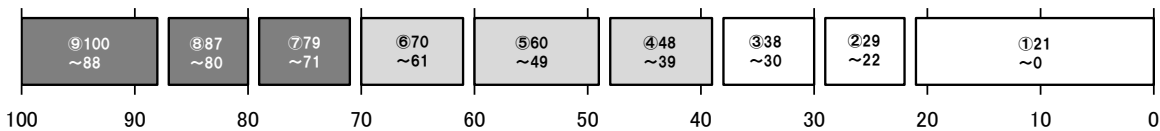
【生物基礎】



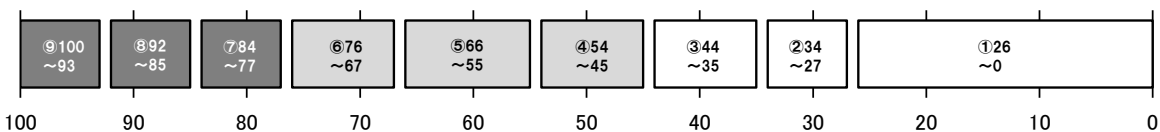
【地学基礎】



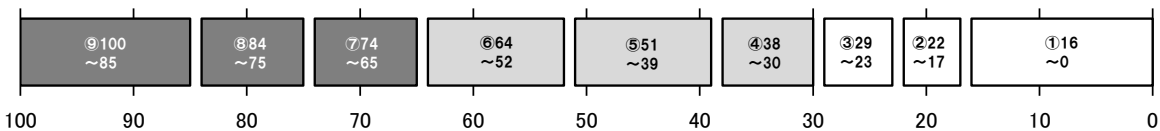
【理科①合計】



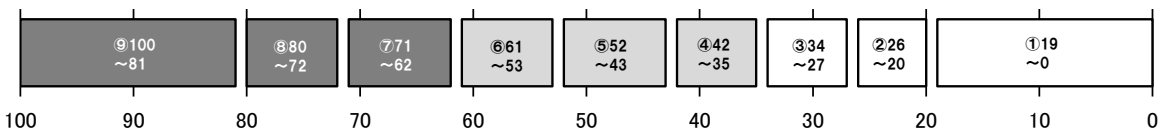
【物理】



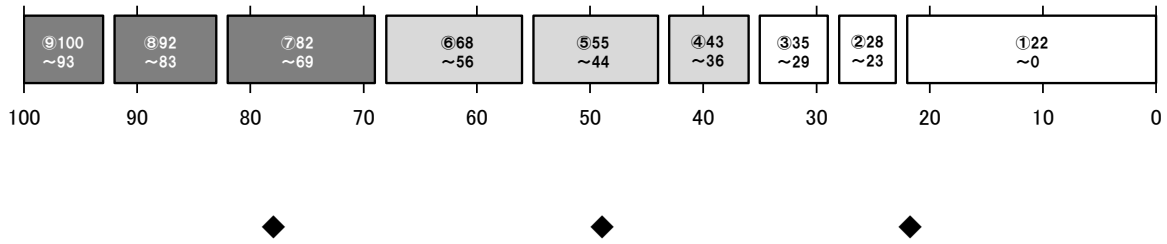
【化学】



【生物】



【地学】



共テ導入当初より、共テはセ試より難化し平均点はダウンすると予想されていた。昨年は予想に反して平均点は下がらずほぼ前年並み、今年は2年目ということもあり、また、もとのセ試より難化ということが実態として現れたと言えよう。

昨年と同様に、新型コロナの感染拡大が入試本番期を襲った。また、共テ1日目の試験前には、東京大本郷キャンパス前の路上で受験生らが襲われる事件が発生。さらに共テ後には、試験時間中にスマホを利用して外部に問題を流出させてのカンニングが報じられるなど、受験生の心理を揺さぶる事件が続いた。

年末には、オミクロン株の拡大に伴って、その濃厚接触者の受験資格をめぐる国の方針決定が揺らいだ。1月11日、文科省はコロナ感染の急拡大を受け、コロナを要因として共テの本試験・追試験のいずれか、または両方を受験できなかった受験生について、個別試験で合否判定することなどを全国の大学に要請した。東京大は、2月15日の記者発表で、大学として該当者として認めた共テ未受験の4人を個別試験のみで合否判定すると公表。2月22日には末松文科相が記者会見で、コロナで共テ未受験の受験生の出願を国公私立大17大学が受け付け、人数は延べ22人（2月21日現在）と公表した。

コロナ禍のもと今年の共テでも、受験生にはさまざまな困難があったが、オミクロン株が猛威をふるうなか、共テ試験会場での集団感染発生は昨年同様、報告されていない。受験生、その家族、高校・大学関係者、入試センターの並大抵ならぬ取り組みの成果にほかならないことを付記したい。

(2022.3 加納)